

## スラカルタの日食観測

天文博物館 五島プラネタリウム 増沢 等・村松 修

五島プラネタリウム星の会と東急観光本社ツアーの42名は、6月10日夜にスラカルタのホテルへ到着した。11日のジャワ島中部の天候は、曇天の予報であった。これは大変なことになったものである。早速、東急観光添乗員（人見・坂根の両氏）と我々の4人で11日の行動を打合わせた。観測予定地のポヨラリは、ホテルからバスで約1時間30分の距離にある。空港からスラカルタに入る途中に下見をしたが、ポヨラリの村長さんはポヨラリとスラカルタ

の天候は同じであるという。ボヨラリは、幹線道路よりはずれているため、現地の天候が悪い場合他へ移動するにはロスタイムがあつて晴天域を探す時間はなさそうである。結論は、スラカルタ近くの観測地を探し、第1接触の1時間前までに太陽が見えない時は、スラカルタに残る班とバスで移動する班に分けて行動することに決定した。参加者全員に11日の行動を説明した後、地図をひろげてバスの移動先を考えているうちに夜が明ける。11日午前6時、外は霧雨でどんよりした厚い雲に頭を押さえられているような天候である。いよいよ悪い予感がしてくる。とにかく、ホテルの近くの観測地を探す必要がある。ツアー参加者よりも早くホテルを出て、前夜に見当をつけておいたサッカー場へ向かう。少し雲がうすくなったようで上空が明るくなって来た。ホテルへもどり、バスで10分程のサッカー場が使用できることになったことを全員に伝えて朝食をとる。太陽が見えないためか全員黙々と食事を取り、会話をする人はいない。午前8時45分、ホテルを出発。サッカー場に到着すると、天候が急に回復し、雲間に太陽が見え始めた。雲塊は、ゆっくりと流れ上空に風があることがわかる。いけるぞ！ 全員の声明るくなって来る。サッカー場は、約15,000平方メートルと広く、その中央に磁石を使って南北線を引いて、赤道儀がならぶ。赤道儀のまわりに、カメラ三脚をならべて半径15mの範囲に観測隊は展開した。コマンドーの声が届く範囲である。第1接触の30分前、雲量は多いが充分観測できる条件になったので、バスでの移動は中止した。9時55分10秒、第1接触。いよいよぶっつけ本番である。雲間に見えかくれする太陽を追って、シャッターを切る。食分95%。薄雲の中に細い太陽が見えている。皆既までに雲から太陽が出てくるだろうか。全員の眼は、空の一点に集中している。第2接触まであと20秒。アッ、コロナが見える！ 薄雲から太陽が出た瞬間にダイヤモンドリングが輝き、モータードライブの音が続く。ワー、きれい！ 第一声は添乗員であった。双眼鏡で見るコロナの姿をスケッチする人。ビデオの録画や望遠鏡で撮影する人。皆既中のスカイラインを撮影する人。各自のスケジュールをこなしてゆく。赤トンボが飛んでいる！ 金星が見えるぞ！ 太陽の西側に火星が見えます。コロナの中に見えています！・・・・・・ あと20秒で第3接触です！ えっ、うそだ。まだ半分くらいじゃないのー！ 薄雲がかかったコロナの姿が消え始めると、いきなり一点が輝き、ダイヤモンドリングの光が虹の輪となって広がってゆく。ワー、きれい！ そして5分4秒間のドラマは終わった。バンザイ。バンザイ！